

# 浄土

monthly  
JŌDO

## 7・8

July・August 2007



御目を見まわして、

わが名を唱うる人やあると御覧じ

御耳を傾けて

わが名を称する者やあると

よるひるきこしめさるるなり。

されば一称も一念も

阿弥陀に知られまいらせずという事なし

# 浄土

2007/7・8月号 目次

|                     |          |    |
|---------------------|----------|----|
| 浄土宗七千ヶ寺巡礼記 .....    | 小泉顕雄     | 2  |
| おぼんの仏心 .....        | 勝崎裕彦     | 8  |
| 江戸を歩く 第八回 .....     | 森 清鑑     | 14 |
| 会いたい人 山田太一さん② ..... | 関 容子     | 22 |
| 響流十方 .....          | 小村正孝     | 30 |
| 表紙の言葉 .....         | 桜井良夫     | 35 |
| 仏教コラム .....         | 大室了皓     | 38 |
| Jフォーラム .....        |          | 43 |
| 浄土誌上句会 .....        | 選者=増田河郎子 | 44 |
| マンガ さっちゃんはねっ .....  | かまちよしろう  | 47 |
| 編集後記 .....          |          | 48 |
| 表2 御法語              |          |    |
| 表3 教えと法話 .....      | 生野善應     |    |



表紙題字=前浄土門主 中村康隆猥下  
アートディレクション=近藤十四郎  
協力=迦陵頻伽舎

# 浄土七千ヶ寺 巡礼記

京都教区・教傳寺住職  
参議院議員

あきお  
小泉顯雄

大分教区の海岸寺阿部泰明住職との記念の一枚。後ろの碑は国会議員西村英一氏の顕彰碑。西村氏は海岸寺のある姫島出身で、この田中角栄元首相の揮毫による記念碑と潮風荘という記念館が実家近くに建てられている。大先輩議員の碑の前で一年生議員の小泉さんも緊張か。



私は、今日もまた生き生きとして仕事に取り組めるという自分の幸せは、ひとえに仏様のおかげであると思っています。

報恩感謝という言葉がありますが、「おかげ」という言葉を何度も繰り返す中で、恩に報いるということは、たんに言葉だけでなく具体的な行動を示してこそ果たせることであり、感謝の気持ちを具体的な形にしてはじめて私の「仏様のおかげ」という言葉も本当に理解していただけることになるのだと思うようになりました。

その一つの方法は、僧侶であるということを経験の場で発言し、具体的な成果をあげることであるのは言うまでもありませんが、いわゆる雑巾がけに徹することが求められる一年生議員にとって、発言を形にまで仕上げることは至難の業でもあります。

そこで私は、いろいろ考えた結果、六年間という参議院議員の任期中になんとか全国の浄土宗寺院をすべて巡拝させていただき、仏様にご挨拶を申し上げようと発願しました。そうすれば、「小泉の言う『おかげ』も嘘じゃないみたいだ」という理解をしていただけるのではないかと考えたのです。

国会開会中などは日程の調整もなかなか難しく、思い通りにいかない時も何度もありました。おかげで今日の時点で六千五百ヶ寺を回り終え、あと五百ほどのお寺を残すところまで来ることができました。当選後の三年間は国会対策委員というまさに雑巾がけの典型のような仕事を与えられ、週の大半は国会に張り付き、週末は自坊の法務もあって、年間巡拝数は千ヶ寺にも至らないまま過ぎ去りました。その後、文部科学大臣政務官や党の副幹事長という仕事を与えられ、さらに加えて最も忙しく拘束時間の多い予算委員会の理事と議院運営委員会の理事を兼任することになり、巡拝のスピードはまったく上がりず五

年半で四千五百余ヶ寺を記録するにとどまりました。昨年末に、改めて計算をし直したところ、まだ二千五百近いお寺が未巡拝であるという事実を確認して、大きな焦りを感じました。およそ六ヶ月で二千五百のお寺を回らねばならないのです。一ヶ月に四百のペースでなんとか達成できる数字ですが、一日当たりで考えると十〜十五ヶ寺を毎日休まずに回らなければなりません。これは極めて大変です。今の時期に至って、どうも黄色から赤に近い信号が点ったようでもあります。とにかく所期の目標達成に邁進するしかありません。

さて、前置きはこのくらいにして、以下巡拝の中であれこれ思ったことの一端を記してみたいと思います。

私の巡拝は、本堂に上がって下さいとのお勧めをいただいた時は、間近にご本尊様を仰ぎながらご回向させていただくこともありますが、まず本堂前に立って、開経偈、四誓偈、回向文、十念、別回向（諸仏諸菩薩、浄土列祖、開山歴代上人）、総願偈、十念、という順に唱えて、最後に「願い事もよろしく願います」と頭を下げてから庫裡の方を訪ね、ご挨拶をさせていただくというのが基本的なパターンになっています。住職がおられようと、無住の荒れ寺であろうとこの基本を守って巡拝を続けてきました。

庫裡を訪ねた時に、好い反応を示していただけると「万歳!」、「さすが浄土宗」という気持ちになるのですが、いささか反応が好くないことも無きにしもあらずで、そんな時はずいぶん落ち込んでしまうこともありました。

巡拝を始めた頃は、「浄土宗の僧侶で、参議院議員の小泉と申します」と切り出しても、「へえ、浄土宗のお坊さんにそんな人がいたの?」という、何とも私にとっては悲しい反



全国のお寺さんを回り、多くの住職とも挨拶ができたという

応も数多くありましたが、ここ数年、特に最近ではこのような反応はまったくなく、顔を合わせるなり、「あー小泉さん」という反応や、「どこかで見た顔だと思ったよ」とか「いつもあれこれお便りいただくあの小泉さんですか」とか、あるいは「あなたが本物ですか？」などといった反応が増え、また、待ってましたとばかりに政治的な問答をふつけられることなどもあって、この五年余の間にずいぶん知名度もアップしたものだと思ひながら、またもや仏様のおかげという気持ちを強くするのです。

改築の工事が進む地方の田舎のお寺に出会うと、格差が広がり、地方の疲弊が言われる中にもかかわらず、ご住職とお檀家さんが一体となって大事業を進められることの尊さを痛感させられ、ご住職の日頃の教化に深い敬意を覚えるとともに、ご先祖と菩提寺に寄せられるお檀家様の魂のようなものに打たれるばかりです。お寺が地域の人々の心の拠り所となり、命の洗濯の場になっているように思うのです。しかし一方、廃村寸前の山奥の村、いわゆる限界集落という言葉が実感される寒村に入り、大きく傾き、今にも倒れそうになった小さな寺院に出会った時などは、「村が消える」、「寺が消える」という現実の実際の姿だと思ひ、消えゆく念仏の拠点を憂いました。

開放されたお寺でご本尊の顔を仰ぎながら回向し、笑みを浮かべながらお迎えいただくご住職や寺庭婦人にご挨拶ができるとすがすがしい思いになります。が、やや閉鎖的な雰囲気があり、インターホン越しでしか挨拶できず、「あなたはどなた？何かご用？どんなご用？」とインターホンから問われると、極めて複雑かつ残念な気持ちになることもありました。

境内に幼稚園や保育所を設置しておられるお寺にもずいぶん出会いましたが、子供たち

の歓声が響く境内は未来に向かう何か生き生きしたものを感じます。

ワンワン吠える大きな犬が放し飼いになっているお寺では、かなり冷や冷やしましたし、けたたましく吠え続ける犬のいるお寺では、「お檀家さんにもこうして吠えるのかなあ」と余計なお節介的な心情にもなりました。

元気があるのは国内開教の寺院です。つい先日、沖縄で二十年前に創建されたお寺の二十周年記念式典に出席しましたが、独特な宗教風土のある沖縄で、二十年の間に多くの檀信徒を育てた八十歳の住職のパワーに圧倒されました。また、鹿児島では新たな開教寺院を興し、幼稚園を併設しながら教化に取り組んで来られたお寺の門前で、その幼稚園の卒園生が下校する時、門前にいる住職の姿をみつめて笑顔で「ただいま」と大声をかける、住職である園長先生がこれまた笑顔で「おかえり、おかえり」と応えられる姿を見て、地域における人間関係のあり方の原点を見た思いにもなり、ただただ感銘するばかりでもありました。

一方には消えゆく念仏拠点があり、一方では着実に歩みを進め、躍進する拠点もあるのです。浄土宗として、是非とも開教師の方々を応援するとともに、限界を越えてしまった集落からなんとかお寺が消えずに、念仏の拠点として檀信徒のみならず都会の人々の癒しの場として再生できるような方策も考えていただきたいものです。過疎対策の一環としての寺院再生を、宗門だけでなく仏教界全体の課題として議論されることを願いたいと思います。

格差が広がる中で人心の荒廃が進んでいます。日本仏教の革命者と言われた法然上人こそは、目の前にある格差に向き合い、日々の生活に汲々とする生活弱者こそを救わねばな



滋賀教区の檀信徒大会での小泉さん

らないとの思いからお念仏による救済の道をお開きいただいたのだと思います。格差をしっかりと見つめ、法然上人のお考えを辿らせていただく気持ちを常に持ち、浄土宗の僧侶として政治に向き合わねばならないと常に自分に言い聞かせています。

六千五百のご寺院を巡拝して、それぞれのご本尊が「おまえの思いに大きな間違いはない。そのまま進め」と励ましていただいているように思えるようになりましたし、残りの五百余のご本尊が、「気をつけながら、その思いを大切にしながら、訪ねて来い」と、お待ちいただいているようにも思えます。自分はなんと幸せな境遇の中に生かさせていただいているのかと思うばかりでもあります。

私の師匠でもある父親は、「お寺はなんでも最後でいい」と言うのが口癖で、実際、テレビや車をはじめ色々な文明の利器は、世間に広く普及してから買いました。六千五百のお寺には色々な表情があります。首をかしげたくなることもありましたが、多くのお寺では、参拝者やお檀家さんの気持ちを大事にする寺門経営のあり方のようなものを学ばせていただくとともに、父の言葉を懐かしく思い出すこともできました。

巡拝を続ける私に、多くの方々から「偉いね」と激励の言葉を寄せていただいていたが、私の巡拝の動機は俗っぽいことに絡むだけに、極めて不純と言わざるを得ないのが実際です。「いやいや、私はお褒めいただけるような人間ではありません」と、愚者たる己を決して忘れずにお返事するよう努める今日この頃でございます。

こいずみ・あきお

昭和26年京都府園部町生まれ。鳥取大学教育学部卒業 佛教大学文学部佛教学科専攻科修了 広島大学大学院学校教育研究科修了 現在、浄土宗京都教区教伝寺僧侶 参議院議員 参議院国家基本政策委員会理事 参議院 文教科学委員会委員 自由民主党 社会教育・宗教関係団体委員長 同文化・スポーツ局長 (財)浄土宗報恩明照会 理事などの要職を務め、また浄土宗総本山知恩院・大本山増上寺・金戒光明寺・清浄華院 布教師でもある。著作「丹波の魚たち〜八木〜」「教えろ 伝えろ」など多数。

# おぼんの 心

大正大学教授

勝崎裕彦



一

お盆行事は、日本人の精神と生活の伝統に深く根差した大切なゆかしい信仰習俗である。七月、八月、日本列島はお盆にまつわるさまざまな行事が営まれ、多くの人々がいろいろな接し方で、そうしたお盆習俗にかかわる。まさに猛暑酷暑の暑中の休暇の折柄とも重なって、お盆行事は日本列島を横断・縦断する夏の風物詩ということになる。

実際お盆は、正式には盂蘭盆会と称して、信心・信仰を勧め、供養の心を深める仏教の重要な年中行事の一つである。とくに今は亡き精霊<sup>みたま</sup>へまごころを寄せ、菩提の冥福を篤く祈り願う心根、心差しは、多種多様なお盆の儀礼習俗の中に巧みに込められて、尊く伝承されてきたのである。それ以上に盆祭り、盆踊りなどの人々に憩いと気晴らしを与える祭事として、伝統的な全国の有名な祭礼だけでなく、最近では地域社会の懇親交流のための

各地の多彩なイベント行事に至るまで、お盆にかかわる夏期のスケジュールはまことに盛り沢山である。

とりわけ八月の月遅れ盆、旧盆行事に合わせる国民休暇の風は、父母兄弟、家族親族へのいとしい思いにふるさとへのなつかしい思いが重なって、日本列島の行く先々で繰り広げられる帰省ラッシュやUターンラッシュのピークとなる。乗り物の混雑や高速道路の渋滞などをよく我慢辛抱して、それでもふるさとと回帰を目指すのは、そこに「心のふるさと」「いのちのふるさと」があるからであろう。

二

一口にお盆といっても、行事習俗の面からも、また時期的・期間的な面からも、日本列島の各地各所で、それぞれの伝統伝承のゆかしい慣習を受けて、変化に富んだ多彩な仕方・あり方によって今日に継承されている。ここでは歳時記的に、お盆行事の時期・期間

について少しく要約しておきたい。

知られるように、盂蘭盆会の行事は有名な仏弟子の一人である目連尊者の故事にまつわる『盂蘭盆経』の教えに由来している。そこに説かれる安居あんごの修行期間（普通には、陰暦四月十六日から七月十五日までの雨季いちげ一夏三ヵ月九十日間）の最終日である僧自恣日そうじしにち、つまり出家僧侶たちが、修行中のことをお互いに反省し合い、懺悔し合う七月十五日の営みの中から出発したのである。その意味で七月十五日という日にちに大いなる意味があり、後に中国の中元の佳節についての思想も加わって、お盆行事の期日の基点となっているわけである。

そこでまずお盆の期間ということであるが、各地各所における長短はまことに様でない。七月十四・十五日の両日とするもの、十三日から十五日までの三日間、あるいは迎え盆、送り盆の日にちを取って、十二日から十五日、十三日から十六日、十二日から十六

日までなどさまざまである。

また盆支度・盆用意のこともあり、七月一日を盆の入り、つまり盆入り・盆始め、つまり盆朔日ぼんついでとし、七月七日は七日盆、地方によってはこの日を盆の始めとするという。もつといえは、六月晦日みそかからすでに盆迎えの用意がはじまってもいる。これに対して盆の終わりに、盆明けは、十六日や二十日、二十四日、さらには七月晦日といった具合である。さらに八月一日を八朔盆はっさくぼん・盆朔日として、盆の終わりをとくに期する地方もある。

このように旧暦・陰暦でいう七月のお盆行事は、かつては農作や漁労といった仕事の合間との関係もあつて、三日遅れ盆とか十日遅れ盆の風を各地に根付かせた。たとえば養蚕にかかわる蚕盆かいこぼん・御蚕盆おかいこぼんなどが、その一つの例である。

こうしたお盆行事であるが、現在では新暦・陽暦で七月盆、月遅れの八月盆ということになるが、なかには旧暦・陰暦の暦に合わ

せての旧盆行事を営んでいる地方もある。加えて盆祭りや盆踊り行事が、古式ゆかしい伝統的な大祭や地域地方のささやかな祭事まで、新旧色とりどりにさまざまな催し物が営まれて、まさに日本全国の七月、八月は、「おぼん列島」と称しても過言ではなからう。

### 三

旧暦思想でいえば七月・八月・九月は秋である。したがって俳諧の季語の区分では、陰暦七月は初秋・新秋で、お盆行事にまつわる豊富な季語はすべて〈秋〉の項に含まれるわけである。以下俳句歳時記のページをめくりながら、お盆時分の秀句佳句を少しく鑑賞して、私なりの感想を付してみたい。

盆用意すべてととのひふと虚し 長谷川浪々子  
盆支度して古町のひそとあり 及川貞  
風知りて鳴る熊笹や盆近し 桑原視草

お盆を前にしての盆棚の仕度やら、なにやかやの準備は、今は亡き精霊への心からの供養のあらわれとしておさおさ怠りがあつてはならない。そうした中で、浪々子は「ふと虚し」と下五を置いて、亡き精霊へのさみしさ、せつなさをにじませている。貞が「ひそとあり」としたのも同じ情趣と受けとめてよいし、視草は熊笹の鳴る音に聞き取ったのである。

草踏んで墓見に來たり七日盆 村上しゆら  
盆路や顔ひんやりと杉の中 外川飼虎

七月七日は七夕の日であるが、この日は七日盆である。この日を盆入りとして、磨き盆・墓薙ぎとして、仏具のお磨きや墓掃除をする。お盆を迎えるには、墓地を中心とした精霊の通路である盆路ほんみちづく作りも欠かせないのである。草を踏んでの路刈り、時に杉木立の中のひんやりとした空氣に、ひとしお感じ入ることもある。

身うちみな仏になりて草の市 中勘助

盆花のひとかかへ買ふ朝の市 呉服元子

草々の盆用品を売る草の市・盆の市は、かつては七月十二日の夜から十三日の朝方までの夜通しの市がにぎわったという。中勘助は、草の市のにぎわいに対して身内のものを亡くして一人残った静寂を、小説家、随筆家としての作風にも通ずる物静かな恬淡としたさまで素直に作句した。また元子は、「ひとかかへ」という表現で、魂棚への供花に込める自分の思いを伝えている。

迎火や焚いて誰待つ紹の羽織 夏目漱石

迎火や細き苧殻を折るひゞき 渡辺水巴

盂蘭盆や無縁の墓に鳴く蛙 正岡子規

男手のやがて侘しき魂祭 杉山岳陽

新盆や悲しけれどもいそくと 田口秋思堂

魂棚の见えて寂しき昼寝かな 村上鬼城

おもかげや二つ傾く瓜の馬 石田波郷

父乗せて少し俯く瓜の馬 二本松輝久

送り火やすゝろに消えてゆきにけり 高橋淡路女  
流燈の唯白きこそあはれなれ 高浜虚子

さて迎え火から送り火まで、盆会・盆祭の句を並べてみたが、もとよりいずれもせつない心、はかない思いが惻々と伝わる句でもある。今は亡きなつかしい、いとしい精霊を思い迎え、供養のまごころをささげて、やがて魂送りするやるせない、かなしい、せつない時——、正岡子規の句は、無縁仏の墓に蛙の鳴き声を写生しているだけである。

こうしてやがてお盆も終わり、盆明け・盆過ぎとなる。目連尊者の亡き母への供養の心からはじまったお盆行事のゆかしいまごころを、ここでは次の二句によって改めてはるかに偲びたい。

盆すぎで一人づつ去る母の家 大沢ひろし  
母の座は常のごとくに盆果つる 橋爪四禾子

#### 四

「精霊」とは死者の霊、靈魂のことである。漢音では「せいれい」と読むが、仏教語としては呉音で「しょうりよう」と読む。ほかに、「しょうらい」とか「しょうろ」とも読み、死者の靈魂であるから「御精霊」と尊称して、これを方言では、「おしよらい（さん）」「おしよろい」「おしよれ」「おしゅうろ」などと呼称している。私は「みたま」と読んで、「御霊」「御魂」という字義に通じさせている。お盆行事は今亡き精霊、つまりみほとけ

への追善冥福の心を深め、礼拝供養の心を篤くいたすことである。当然、亡き精霊へ心を寄せ、思いを重ねることは、亡き精霊のいのちを敬慕し、そのいのちを尊くいただいて今ここに生き生かされていることを心より感謝することである。尊崇敬慕の祈りと報恩感謝の思いの中に、おのずからお盆の仏心が育まれて行くものであろう。お盆の仏心をいささかとも汲み取り、掬い取るためには、今は亡き精霊へひたすらに心を寄せ、ひたむきに思いを重ねることであろう。ここに改めていうまでもないが……、かけがえのない尊いいのち、いのちうるわし、いのちありがたし――。

## 古き伝統技 三代にわたる信頼

有限  
会社

### 浄土宗法衣専門

## 古島法衣店

〒114 東京都台東区元浅草4の2の1

電話 (03) 3842-1128 9

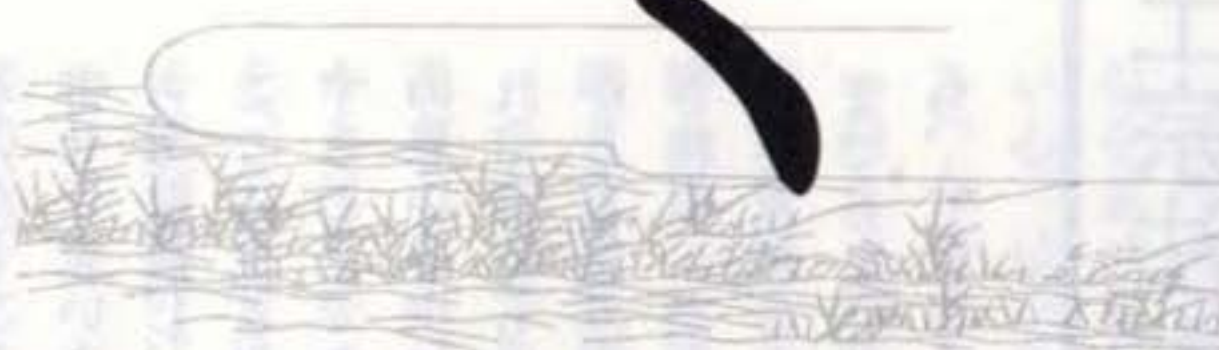
振替 00180-245231

# 江戸を歩く

九品仏から目黒へ

第八回

田園編



大江戸ウオーカー

森 清鑑

## 浄真寺

浄土宗浄真寺は、むしろ九品仏としてなじみ深い（世田谷区奥沢）。明治期の地名は、荏原郡玉川村大字奥沢。江戸時代には、衾村、碑文谷村と隣り合わせ。浄真寺は、江戸の雰囲気を今に残し、心を癒す霊場としての空気が漂う。江戸期、この寺の周囲は、全くの田園風景。浄真寺から目黒不動尊に至る地域は、江戸の台所とも云うべき農産地であり、いくつもの川が流れ、田園と小高い山が織りなす有数の景勝の地でもあった。しかも広い田畑の所々に由緒ある寺社が存在し、江戸庶民にとっては信仰と遊興をかねて訪れる、馴染み深い土地柄でもあった。

浄真寺の自然風景を今一度再現してみよう。東門を出て北の方に向かうと、敷地に面して湧水池がある（ねこじやらし公園一帯）。湧き水である。その清流は、寺を囲むように流れ、呑川方面に向きを変え合流している（九品仏



◆九品仏に向かう道標（目黒通り）。

川、九品仏緑道）。美しい自然の川を田んぼが川を挟んで見渡すばかり。明治になっても浄真寺東門前方には、字谷鷺草、字鷺の谷など鷺草の群落を想起させる地名が残っている。南の参道一帯は、字城前であり（東急大井町線九品仏駅に至る）、その東、九品仏川までは字城向である。そう、浄真寺が建立される前の室町時代には、ここに奥沢城があった。参道を通じて（九品仏駅前）、浄真寺を参



◆浄真寺、九品仏。左下参道と総門。左中央に土塁。江戸名所図会



◆本堂とオオイチョウ



◆参道



◆上品堂



◆総門



◆カヤの古木



◆仁王門



詣する。櫓やイチョウの古木の中を歩く。鬱蒼とした自然。左に並ぶ庚申塔。やがて風格を漂わせる総門。江戸期にはこの辺り、参道沿いに茅葺きの民家、茶店があつた。左手民家の背後には田んぼが広がる。そして田畑と一線を画す土塁が西に向かって寺を囲むように築かれている。総門の扁額は、「般舟場はんしゅうじょう（般舟三昧Ⅱ常に行道念仏して眼前に諸仏を見奉る）」。手を合わせてくぐると、右手に閻魔堂。大きな閻魔様が控えている。さらに六地藏。禁猟区の石柱（明治期のもの。参道にもある）。正面は開山堂、方丈、客殿。右、東門。左に高さ三十メートルの山門。仁王門、紫雲楼（楼門）とも云い、江戸建築がそのまま残っている。東門から入れば真つ直ぐ正面。左右の仁王様を拜んで入ると、広い境内が展開する。右手は本堂、左手に鐘楼。鐘楼を土塁が囲んでいる。そして樹齢何百年のオオイチョウ（都の記念物）。江戸期には屋根付きの休憩所らしきものがいくつも並んでおり、腰掛

けて休んでいる人の姿も見える。境内は人々が行き来している。正面奥に一定の距離を置き、左右一直線に三仏堂が並ぶ。左、下品堂げほんどう、本堂の真向かいが上品堂じやうほんどう、その右が中品堂ちやうほんどう。各堂には、中生、上生、下生の大きな阿弥陀如来像三体が端座されている。合わせて九阿弥陀如来様。「九品仏」の由来である。

これらの阿弥陀様は、開山、珂碩上人かせきの手になる。偉大なる仏師でもあつた。上人は芝増上寺系、靈巖寺の高僧。靈巖島（中央区）にあつた同寺が、明暦の大火で焼失し、深川の現在地に移転したのが一六五八年。この時、寺の建て直しに奔走したのが珂碩上人である。上人は、自ら浄財を貯え、造仏の費用と成し、数年の歳月を経て九品仏を造ったという。従って、仏像は、靈巖寺で完成した。延宝六年（一六七八）、四代家綱の治世に奥沢城跡地を賜り、浄眞寺開山。珂碩上人は、仏像を収める三仏堂を見ずに亡くなっている。高弟で二世になる、珂憶上人が遺志を継いで三仏堂を

建立した。中品堂の裏手には珂碩上人の墓。その右手に二世以下歴代上人の墓がずらりと並んでいる。そして中品堂の前には、カヤの巨木が立っている。樹齢数百年。江戸期の人々もその荘厳な姿に圧倒されたことであろう。

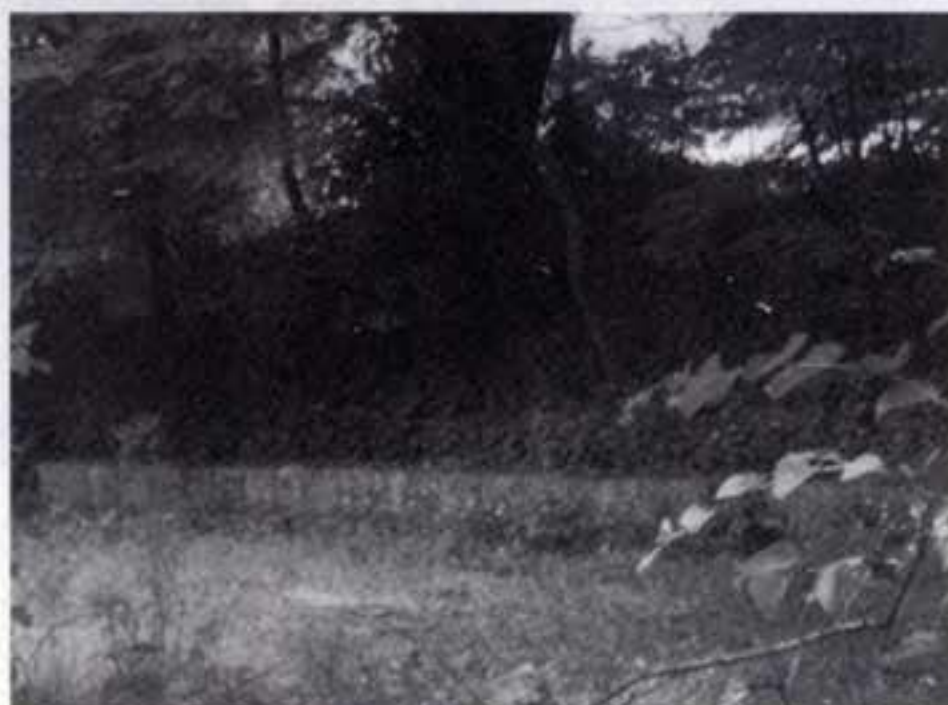
### 奥沢城と吉良氏

仁王門の左手に「奥沢城跡」の石碑が建っている。秀吉が小田原城を落とし、関東を支配していた後北条氏を滅ぼすまで、ここは吉良氏配下の奥沢城であった。館主は大平出羽守。総門から南側の土塁は今に尚、城塞の痕跡を留めている。三仏堂の背後、寺社の西側は、江戸期もつと迫り上がっており、丘を利用した土塁を忍ばせる。北側に広大な墓地が広がっているがそこから先は崖であった。東側は、九品仏川が流れる「奥沢の底なし田圃」。云ってみれば、四周を土塁や自然の防塞で囲まれた地形ができていた。過去二度の発掘調

◆奥沢城跡



◆土塁



査が実施され、土塁の外側を取り巻くように空堀があったようだ。また、参道入り口には大手門が在ったと云われる。

室町時代、世田谷吉良氏は、世田谷城（豪徳寺まで含む）を本拠にここに出城を築く。世田谷吉良氏は、名門足利氏の氏族。三河より起こり、室町幕府の要職を歴任後、奥州探題として陸奥の国に勢力を拡大した。三代足利義満の時に、奥州を撤退し、鎌倉府直属の配下として横浜の蒔田城、世田谷城を築いた。その後、玉川泊江の江戸氏と協調、現在の世田谷を軸に大田、目黒区に及ぶ勢力を築いた。北条氏が関東を支配する前の上杉時代には太田道灌とも協力している。吉良家が時代の支配勢力が変化しても存続できたのは、足利の氏族ということとで常に尊重されてきた特別の存在であったからである。忠臣蔵でおなじみの吉良上野介の吉良家とは三河吉良庄の出元は同じだが、鎌倉後期から別の道を歩む。世田谷吉良家は、三河の西条吉良家に対して、

東条吉良家と称されている。足利幕府が滅ぶと関東管領の上杉氏に代わって、北条早雲が起こした後北条氏が関東を支配。今度は後北条氏に与みする。早雲の後継者、二代氏綱は傑物で足利の血を引く、関東吉良を尊重し、姻戚関係を結び、関東支配の橋頭堡として尊重している。北条氏の関東における善政（年貢税制など）は、庶民の大いなる支持を得た。勝海舟もこの北条の政治には感心している。それがために北条の後、江戸に入った家康は、庶民の優遇維持策に腐心したという。秀吉の全国統一に伴い、著名な小田原城攻めが行われた。小田原城落城時の世田谷吉良家領主は、吉良氏朝。江戸時代が始まると、その子頼久は、家康から徳川家旗本に取り立てられた。この時、名前を吉良から蒔田に改めたので、鎌倉時代から続いた武蔵の名門吉良氏は消滅したのである。

## 鷲草伝説

嘗て、淨眞寺仁王門の左手に天然の鷺草群落があった（駐車場）。草や木立を分け入ると、七月後半から、美しくも可憐な花が咲き誇っていた。神秘的な想いがしたものである。今、本堂の右手に新たな鷺草園が作られている。水苔の床を清流が循環し、高さ三十センチほどの鷺草が咲き乱れる。大勢のカメラを手にした人々が訪れる。鷺の羽ばたく姿を縮小したかのような、このラン科の真白い花は、野草の中でもとりわけ特異な存在感を漂わせる。九品仏は、「鷺草の寺」としても名高い。昔、田園を流れる九品仏川のあちらこちらに鷺草が咲き乱れていた。清流の湿地と適度な陽光が自然の群落を産んだものと思われる。そのごく一部が寺のお陰で自然状態のまま保存されていたのである。九品仏川緑道には「鷺草の里」の石碑が建っている。

そして鷺草伝説が誕生する。伝説によると、天文（永祿年間（一五三二―一五六九）の頃、吉良頼康が、世田谷城の出城として奥沢城を

築いたという。館主は、最も信任の厚い家臣、大平出羽守。頼康は出羽守の娘、常磐姫を側室に迎える。その美貌と気だての良さに溺愛。やがて懷妊。ところが殿の子であるのか疑わしいとの妬み、中傷が流され、頼康も不義の思いに駆られ、次第に常磐を避けるようになる。思いあまつた常磐は死を決意する。その日、子飼いの白鷺に事の次第を記した文を付け、父の出羽守に伝えるべく、奥沢城に放つ。ちょうどその時、頼康は奥沢城近辺で狩りをしていた。そして、皮肉にもこの鷺を撃ち落としてしまう。足に付いている文を読んだ頼康は仰天。すぐさま、世田谷城に戻る。しかし、時すでに遅し。常磐は、城を出て、お腹の子と共に自害していた（若林、烏山川、常磐橋）。子は頼康の子であった。中傷を駆り立てた側室、家来を成敗したが常磐が戻ってくるわけではない。頼康は常磐と子の菩提を弔うために塚（常磐塚）、と若宮八幡（駒留神社）を立てる（世田谷通りと環七の若林交

差点近く)。『江戸名所図会』では、著者斎藤幸孝と見られる人物がこの話を村人から聞いている図がある。弦巻の常在寺には、常磐の墓がある。鷺草伝説は、いくつかあるがいずれも鷺草に結びついている。文を届けようと、目的地の直ぐ側まで来て、打ち落とされた白鷺の無念が鷺草に姿を留めたというのである。鷺草は世田谷区の区花となった。



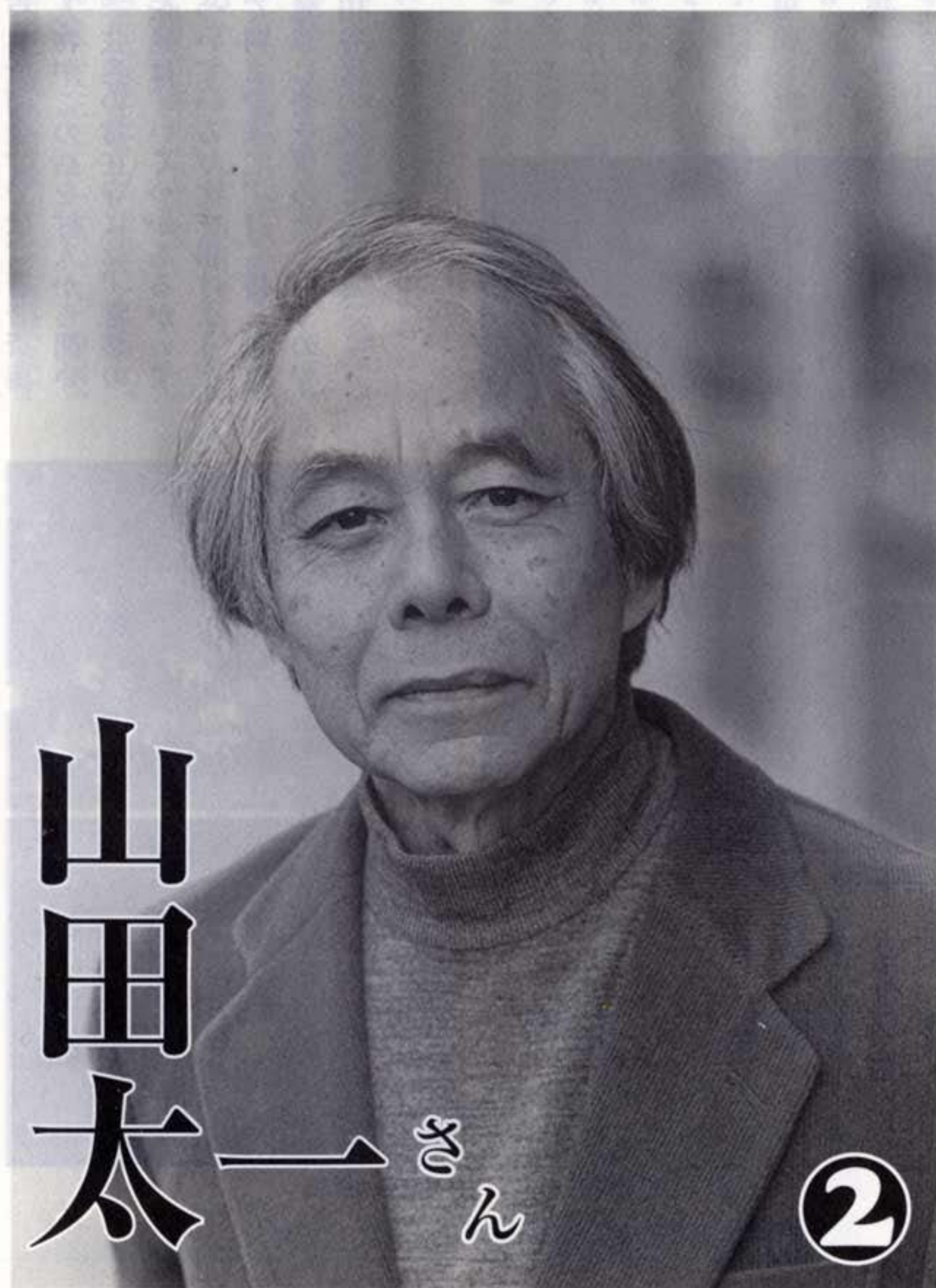
◆九品仏川緑道石碑 鷺草の里



◆浄真寺の鷺草。

連 載

# 会いたい人 関 容子



山田  
太一さん

2

山田さんの母は昭和二十年一月、五十歳で亡くなった。敗戦間近の湯河原には、白衣で歩く傷病兵の姿も多く見られた。

「父は、子供たちを食べさせていかなきゃならないし、食料難で食堂もできないので、戦後すぐに東京の浪越指圧学校へ通って資格を取ったんです。で、以前はお客として行っていた湯河原の旅館に、今度是指圧師として出入りする、というのは相当な精神力だと思うんです、子供ごころにすげえな親父は、と思いましたね。ぼくは電話番号で、予定を書き入れたりしてました」

そのころ学校から帰ると、ときどき裏口の土間に女物の下駄があることがあったが、ある日ときびきりきれいな下駄が揃えてあった。「父はお見合いを始めてたんです。あ、これはいつもの女の人と違うな、と思ってたら、やはりその人と結婚することになった。どういうルートか知りませんが、職業軍人の将校の未亡人で、小さい男の子が一人いて、東京

の中央線沿線に住んでる奥様だった人。ぼくたちとはまったく住んでる世界が違うんですね。父のところへ来る前に、ぼくを日劇へ宝塚を観に連れてってくれたんですが、それが映画の『未完成交響楽』の舞台化で、劇中にシューベルトのセレナーデが出てくる。そしてたら小さく口ずさんでるんですよ、その人が、隣りで。なんて教養のある人なんだろう(笑)、と恐れ多いような気がしました」

やがて、二度目の母となったその人は、湯河原の家を改造して美容院を開く。

「連れっ子の三つくらいの男の子が、母親の前じゃいい顔してて、言うこと聞かないんですよ、これが(笑)。ぼくも妹も手を焼いたし、姉はその母とうまくいかないし、父と母も両方でカンにさわってるみたいで、毎日学校から地獄へ帰るような気がしてました。そのうち、名古屋のほうでパチンコというものが流行ってるらしい、これ当ると思う、と父が言い出して、美容院を取りこわしてさっさとパ



1962年、助監督時代。

チンコ店に改装。当然、母は怒って出て行って、離婚ですよ。でも開店したら、当時湯河原には射的とかみやげ物屋ばかりで、まだ一軒もなかったんで大当りしましてね。だんだん温泉客も浴衣で町を歩くようになってたし、それでお金がたくさん入ってきたので、お前、大学へ行っていていいぞ、ってことになった。兄弟はみんな中学止りだったので、父としては一人ぐらい大学へ行かせたかったんでしよう。こっちは急に言われて一浪はしたけど、翌年早稲田に入りました。総てパチンコのおかげで、パチンコに足向けて寝られません(笑)

山田さんは早稲田の国語国文学科に入学する。そこで大きな出会いがあった。一人は寺山修司、もう一人はやがて山田さんが結婚することになる女性。

「寺山は青森から出てきたばかりで、田舎の兄ちゃんという感じだったけど、本をよく読んでたし、ほかの同級生より話が断然面白か

った。友だちとしてつきあう時間が長かったですね。親しくなったキツカケは、あるときぼくが教室で、大阪の詩人の小野十三郎（とうざぶろう）にこういう詩があるよね、っていい調子でしゃべってたなら、友だちがみんな知らない。すると横から寺山がその続きをスラスラと言ったので、あれ？ と思った。佐藤春夫の『秋刀魚（さんま）の歌』とかなら知ってても別になんとも思わないけど、小野十三郎はよほど詩の好きなやつじゃないと……それを知ってるやつがいる、というので寺山を意識しました」

そのとき山田さんが小野十三郎のどの詩を話題にしたのかはわからないが、たとえば「大怪魚」の、海辺に置き去りにされた大きな魚の化け物の「引きさかれた腹から／こやつは腹一ぱい呑みこんだ小魚を／臓腑もろとも／ずるずると吐きだして死んでゐる。……生乾しのまゝ／荒漠たる中に幾星霜。／いまだに／死臭ふんぷんだ。」なんて、いかにも寺山修司好みのような気がする。

1979年、TBS系列の金曜ドラマ「沿線地図」発表会での山田さん

# 金曜ドラマ 沿線地図



「大学一年のとき、ぼくが河出書房の『文藝』という雑誌の学生小説コンクールに応募して、佳作に入ったんです。学校名と何学部まで出て、でもぼくが名前の字を崩して書いたせいで、山久太一と発表されてたので、寺山

が、ヤマモンメって君？ って訊いて（笑）、ああ、君も書くんだ、俺も書くんだよ、って言った」

山田さんのその小説の題は「喝采」。選考委員は川端康成、丹羽文雄、青野季吉などだ

った。この錚々たるメンバーに評価されたのだから、すごいことだ。

「コピーもない時代だったので作品は全然残ってないんですが、でも批評家って炯眼だな、と思ったのは、青野さんがぼくの書いた小さな家族の話を、どうもテレビドラマみたいだ、って批評したんです。そのころぼくはテレビなんてことは思ってもみななかったですからね。また、そのときの一位入選が岩橋邦枝さんだったけど、これもすごいなと思いますね」

ところで早稲田で山田さんの先輩に当る篠田正浩監督から「寺山と山田は仲がよくて、毎日学校で顔を合わせるのに、文通してたんだからね(笑)」と伺って、まるで女学生のS<sup>エス</sup>みたい、と思い、山田さんに訊ねてみた。

「会えば議論ばかりしてて、ここまですヨナラと言うと、もつとしゃべりたくて書く。両方で渡しつこして読んで、また議論するんですから、別におかしいことはないですよ(笑)。人恋しい時期があるもので、いい友だ

ちを持ったという喜びのほうが大きかったですね。でもそのうちに寺山が腎臓病<sup>ネフローゼ</sup>になって、大久保の病院に入院してしまった。すると早稲田から近いし、行けば必ずいるわけですよ。そこでまた長居しておしゃべりする。あるとき立川で働いてた彼のお母さんが、両手に大きな荷物を持って入ってきて、ものすごい顔で睨んで、いたたまれなくて帰ったことがありました。寺山はもう俳句でも短歌でも韻文でも、すごいものを発表してたし、病院ではラジオとかにも書くようになってましたから、そのまま大学は中退しちゃって、ぼくが大学を出て松竹に入ったとき、祝卒業、就職、と書いて、アーサー・ミラーの戯曲集をくれたのが今うちにありますけどね」

そして山田夫人となる同級生との出会いは……。

「彼女はテレビ朝日の前身、当時のNETに就職して、開局前でわりと時間があつたんですね。ぼくは松竹の助監督になって、最初に

ついた番匠義彰監督の組が南原宏二主演の『坊ちゃん』。みんな松山へ長期ロケに行ってるんですが、新人のお前連れてく金がないから自宅で待機しろ、って言われて、アパートにずっといました。両方で時間があつたからデートした、というわけですよ(笑)」

篠田説では寺山修司も彼女が好きだった、とか。

「まあ、友だちが好きと思わなければ好きだと思わないみたいなこと、あるじゃないですか。寺山とはほかのことでもそういうことがありましたからね」

山田さんが松竹の助監督募集に応募。すごい倍率を突破して採用された七人の中に入つた経緯を伺つた。

「ほとんど作文の点の比重が大きかったですね。課題は、この写真を見てショート・ストリーを書け、というんです。ある有名な写真家が一八三〇年代の大恐慌のときに撮つ

た、一人の女性の写真。みすばらしい服装で、悲しげな表情をしてる。それでぼくの書いたのは『西洋乞食出世譚』。疲弊して神戸の町にいる西洋乞食が、ただ白人だということで行く、というコントみたいなものでしたけど、あとで聞くとそれを気に入ってくれた先輩監督が強く推してくれて、それで通つたんだというようなことです」

助監督になって何作目だったかに、『夕陽に赤い俺の顔』という篠田監督の組についた。その脚本家の名は寺山修司、とあつた。

「篠田さんはそのころ、ぼくと寺山が同級生とは知らなかったんですね。あるとき大船に近い団地のロケで、ものすごく寒い日だったから、俳優は集会所みたいところで待機していたんです。出番の俳優さんをぼくが呼びに行つて、ママさんお願いします、って戸をあけたら、中はストーブが燃えてあたたかくて、その中心に寺山がいたんです。ぼくは卒

業まで大学へ行つてたから、スタートが遅れたと言えは言えるんですけど、そのときもう寺山は脚本家の先生で、ぼくは一番下の助監督ですよ。寺山も困った顔して、それでちょっと傷ついて、情けないけど、疎遠になった時期がありました」

しかし程よく山田さんも世に出て、寺山との交際も復活する。

「彼の芝居は最初から観て感想言ったり、その程度にはつきあつてました。渋谷の宇田川町に彼のアパートがあつて、NHKの近くの喫茶店によく寺山がいたんで、ガラス窓を叩くと出てきてしゃべったりね。彼が晩年になつたころ、ぼくの『早春スケッチブック』というテレビドラマの人物を、そんな気はなかつたのに自分のことだと思つちやつて、毎回終ると電話くれた。君んちへ行きたい、と言ひ出したんで、来いよ、と言つたら一人で電車で来ました。溝の口から南武線に乗換えた駅の改札口で待つてたら、お客がみんな階段

を降りて来たのに現われない。それからサンダル履きで、ゆっくり降りてきましたね。そのころ一人で電車に乗るなんてことはなかつたらしいから、相当無理して来たんでしよう。それで娘たちに本にサインしてくれたりして、帰りはうちの車で送りました。しばらくしたら、うちへ来ないか、と言われて、夫婦で渋谷でドイツ映画祭の彼の講演を聞いたあと、一緒に行つてスパゲッティか何か御馳走になつて、そこでタクシーつかまえて帰つたのが彼と会つた最後です。それからいく日もせずに入院して、亡くなつてしまいました」

山田さんは人生のその時どきで、重要な人とのめぐり合いがあつて、よかつたという。「高校時代の友人は作曲家になつて、ぼくのテレビドラマも芝居も音楽を担当してくれてる福井峻さんだし、大学では寺山に会つたし、松竹では木下恵介監督との大きな出会いがありましたからね」

(つづく)

月のはばかりのあいだ、神のりように、経はくるしく候まじか。  
答う。神やはばかるらん、仏法にはいます、陰陽師おんみょうじにとわせ給え。

【法然上人「百四十五箇条問答」】

月経の間、神様へのお供えとして、經典（を拝読すること）は差し支えないものでしょうか。

お答えしましょう。神様へは遠慮すべきかもしれませんが、仏の教えには物忌みなどありません。そのようなことは占い師にお尋ねなさい。

占いだってごっちのペースに

読んでいて思わず噴き出してしまった。と言っては失礼なのだが――。「暦」のことである。いわゆる『〇〇易断』といった類のものだ。

世に溢れている書物といわれているもののうち、文体、体裁ともにトラッドを堅持している代表といえるだろう。個人的には、そのあたりがちよっとお気に入りだったりする。

ここ数カ月、その暦をじっくり読み込む必要が生じていた。もちろん、これまでも読んだことはあるし、高校生の頃など、面白がって何年か買い続けたこともあった。そう、ある意味、楽しい本なのである。

まず、構成が興味深い。方位とか夢判断とか干支による性格判断といったお馴染みのコンテンツは、茶飲み話のネタにも生かせそう。最近のことなのだろうか、国運・株価・社会情勢予断なんてものも載っている。二十四節気の意味や冠婚葬祭に関するマナーなどは利便性が高く、重宝するはずだ。

そして行事表、要は和式カレンダーとでもいうべきもの。これには友引や大安といったいわゆる六曜旧暦などが載っているが、家にぶら下がっている幾つかのカレンダーのうち、一つくらいには六曜ぐらい記載されているから、だいたいはそので済みそうだ。じゃあ、何かメリットは？ 「暦」のカレンダーの面白いのは、全国のさまざまな行事やお祭りなどが記されている点にある。そ

の気になれば誌上旅行だってできそうだ。ついでに言えば、世はビジュアル時代、関連写真をできればカラーでふんだんに掲載してもらえると、旅行雑誌みたいで、より楽しめよう。

しかし、なんと言ってもメインは九星占いだ。ほとんどの人はコレ読みたさに購入しているに違いない。

実は今回、この稿を書こうと思った時に九星について辞書やらインターネットやらで調べてみた。「陰陽道で九つの星に五行と方位を組み合わせ、これを人の生年に当てて……」（岩波・広辞苑）。さっぱりわからない。複数あたってはみたが、理解度が改善される兆は感じられないので、あっさり白旗を挙げてしまった。この際、理屈はどうでもいいことにした。

実際の内容を見てみよう。ちなみに筆者は八白土星、本年七月の項には……活躍に比例して結果の現われる月です。好調、順調に慣れて更なる欲が出てきて一獲千金的な夢を観ると、逆運を招く。強引な行動は争いの元です。特に、口争いには気をつける事――。

おだてておいて最後はしっかりシメている。気を引き締めなきゃ……などと思いつつ、八月、九月を見る。あまりいい月ではないらしいが、熟慮、努力、謙虚さが後につながる、といったアドバイスでフォロー。他の星のページを開い

てみても、どこも似たり寄ったりだ。「運氣良好」的書き出しには、「図に乗るは禁物」的訓示の締めくくり。「運氣低迷」的書き出しの場合には、「努力が身を結ぶ。堅実、誠実で運向上」的持ち上げ方の締め。

ちよつとここで、この記載内容を精査してみよう。筆者七月の例で言えば、「活躍に比例して結果の現われる月です」はまさに「占い」になるだろう。それに続く「好調、順調に慣れて更なる欲が」以下は……。あれ、占いというよりは、いつの世でも言われている普遍のお諭しじゃない!? いや、それどころか、仏教の教えと重なる部分もありそうだぞ。思わず可笑しくなった。

以前、「専修念仏とは関係ない」との理由で、「暦」に関して議論が巻き起こったと聞いているが、そんなことに頓着するような法然上人だろうか。はつきりとそうしたことを禁止した上人の文言は、見当たらないような気がするのだが……。少なくとも、占いなどそもそも往生とは何の関係ないのは明白なのだから、自身の念仏行に抵触さえしなければ問題はないと思える。結局は利用者側の受け取り方と「利用の仕方」なのではないだろうか。こちらのペースに巻き込んで「利用」するか、向うのペースに振り回されるか。

そう、とらわれずに「よきアドバイス」程度に捉え、あとは運、いや阿弥陀さまにお任せすればいい。

(小村 正孝)

## 響流十方こうるじっぽう

袖山榮輝  
林田康順  
小村正孝

法然上人鑽仰会

定価(六〇〇円十税)



文庫判二四九ページ

本誌連載「こうるじっぽう響流十方」が一冊の本にまとまりました。浄土宗気鋭の論客、袖山榮輝、林田康順、小村正孝の三名によるリレーエッセイ『響流十方』。文庫版の造本で読みやすく纏まとまっています。かつてこの同じ三人の著者による『差出人は法然さん』(法然上人鑽仰会刊)は新書版。法然上人のお手紙(本誌連載中のタイトルは「御法語に聴く」)にしたためられた教えを紹介しつつ、そこから想いを羽ばたかせて、ときには軽く、ときには深遠な思考を展開してみせたものですが、今回はあらゆる仏典から言葉を選び、いつそう自由に、そして題名の通り「御仏の教えがあらゆる世界に響き渡る」といった意味で書き継がれたものとなりました。本書の特徴は、なんといっても仏教エッセイを三者のリレーでつなぐという趣向にあり、著者それぞれの個性がときに呼応し、ときに反撥し、そして不思議な和音を醸し出すところにあるといえます。法然上人鑽仰会刊行。申し込みは当会まで。

表紙の言葉

え  
桜井良夫

7・8

月世田谷

浄眞寺

寺地は世田谷城主吉良氏の家臣大平清九郎の居館(奥沢城)跡。開山は珂碩上人。特徴ある堂塔の配置は「観無量寿経」の様相に従っている。西面する本堂は現世(此岸)、その西に向い合う上品堂、中品堂、下品堂の三仏堂は彼岸を表象し、計九体の阿弥陀如来坐像が安置されているので、通称九品仏といい、のち駅名(東急大井町線)や奥沢六、七丁目あたりの地域名にもなった(現在の東横線「自由が丘」駅は開業当初「九品仏前」駅であった)。本堂と上品堂に橋を架し、阿弥陀仏と二十五菩薩の面を付けた信者が行列して渡る二十五菩薩練供養(来迎会)は「おめんかぶり」といって有名。三年ごとの八月十六日に行われる。

# 選択本願念仏集

法然の教え

阿満利磨

訳・解説

角川文庫

定価(六六七円十税)

選択本願念仏集

法然の教え 阿満利磨

訳・解説



人びとを救うために、  
なぜ、念仏を選んだのか

日本仏教史を変えた名著!

角川文庫

今月の新刊

ID  
7267-1

法然上人の主著、『せんぢやくほんがん選択本願念仏集』は、建久九(一一九八)年、ときの関白九条兼実の要請によって著されたものです。法然浄土宗にとって、もつとも大事な書物であるこの書を、このたび阿満利磨さんが角川ソフィア文庫において現代語訳されました。文庫本としては十年前、岩波文庫に大橋俊雄師校注のものがありますが、それ以来の、いやそれ以上の快挙といわなければなりません。

この書は単なる古典、あるい

は名著として読まれることをはるかに超えて、専修念仏の信仰の「いま」と密接に関連しつつ読まれる書物であるからです。なぜかという訳者の希求がそこにあるからです。帯にある惹句「人びとを救うために、なぜ、念仏を選んだのか」は痛切な響きを持って私たちに迫ってきます。もちろん「日本仏教史を変えた名著」とも謳って多くの人々への呼びかけがなされています。

阿満さんは、明治学院大学の教授として長く日本宗教思想史を専攻され、現在は同大名誉教授。独自の観点から法然の思想を研究してきた方です。その著書『法然の衝撃―日本仏教のラディカル』を読んだときの「衝撃」は忘れられません。かつて阿満さんは、世界の宗教史にただ一人のみあげるとしたら、という問いに、ためらわず法然をあげるといいました。近代日本の検証、柳田・折口の民俗

学、この国における宗教、習俗の淵源にあるであろう思想の深層を解明すべく長く研究を続けて来られた、この碩学にしてこの言葉。浄土宗の人間としては深く肝に銘じなければならぬところです。

さて内容ですが、十六章、判りやすく現代語訳されています。現代語訳してなお難解な部分には〔訳者ノート〕が付いています。いわば「註」ですが、その域を超えて自らに語るといった調子なので、読者は訳者とともに原典を理解しつつ納得しつつ進む感覚を得ます。すなわち読者を引き込む力があります。巻末に原文の書き下しも掲載されているので訳との逐一对照をしながら読むこともできます。

蓮門必読必携の一書として、ここに紹介させていただきます。  
(本誌編集部)

仏心とは大慈悲これなり、と經典に説かれている。

さて「大」慈悲とは、頭をかしげてしまふ。慈悲とは抜苦与樂、人から苦しみを取り去り幸せにしてあげることだが、「捨身飼虎」のように自分の体を飢えた虎に喜んで捨てる、それが「大」慈悲の教えなら、到底並の人間の出来ることではない。仏はそのような事を私たちに説くはずがない。

良い話を思い出した。

ある僧堂で二十人ほどの人が修行していたが、持ち物が無くなる事件がしばしば起こった。調べるうちに犯人が分かった。高僧に訴えた。だが何時までも事件は収まらない。高僧は犯人を放置していたのだ。しびれを切らした彼等は高僧に迫った。

「どうしてあの男を教誨されなかったの

ですか。もう我慢が出来ません。どうか彼を追い出して下さい。でなければ私たちがここを出て行きます」

「どうしても我慢できないか」

「もう限界です」

「仕方がない、好きなように出ていきなさい」

「えっ、私たちをお見捨てになるのですか」

「そうではない。お前たちはそれなりに修行を積んだ。ここを出てもなんとかするだろう。しかしあれはまだまだ修行が足りない。追い出したら可愛そうだ。一対一で私が指導する」

それを聞き及んだ当人は感涙にむせび、悪癖をきっぱりと捨てて立派に修行に励むようになったという。

これを大慈悲というものなのか。分かったような気がしてきた。

浄土門主  
総本山知恩院門跡第八十七世

坪井俊映

大本山増上寺  
法主

成田有恒

大本山 百萬遍知恩寺  
法主

服部法丸

〒606・8225 京都市左京区田中門前町一〇三

大本山清浄華院  
法主

伊藤唯眞

大本山善導寺  
法主

阿川文正

大本山光明寺  
法主

宮林昭彦

鎌倉市材木座六・十七・十九

浄土宗宗務総長

稲岡康純

浄土宗大願寺住職  
浄土宗議会議長

神谷英敏

法然上人御誕生地

美作 誕生寺

〒709・3602 岡山県久米郡南町里方八〇八  
TEL 〇八六七 (二八) 二二〇二  
FAX 〇八六七 (二八) 二二六二

〒154・0017 世田谷区世田谷四・七・九

大吉寺

住職 成田昌憲

函館 称名寺

〒040・0065 函館市船見町十八・十四  
電話 〇一三八 (二三) 〇五七四

清水湊

忠高山

實相寺

〒420-0839

静岡市葵区鷹匠

二丁目二四番十八号

玉桂山

華陽院

電話〇五四(二五二) 三六七三  
FAX〇五四(二五二) 三六五六

(学)大乘淑徳学園理事長

淑徳大学学長

長谷川匡俊

〒174-8645

東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園

理事長

麻生諦善

淑徳学園中学校・高等学校

校長

川添 崇

塩釜市

雲上寺

東海林 良雲

本應寺

熊谷靖彦

〒844-1411

嬉野市塩田津中町

学校法人 浄土宗教育資団  
学校法人 東海学園

理事長

水谷幸正

弘経寺住職

(財)浄土宗報恩明照会理事長

金田進徳

〒302-0023

茨城県取手市白山二・九・二八

孤峰山 蓮馨寺 吞龍上人奉祀  
宝池院

児教連・関東地区研修会 九月十日開催  
児教連埼玉教区会長

糸原恒久

蓮馨寺〒350-0066 川越市連雀町七・一  
電話 〇四九(二二二) 〇〇四三  
FAX 〇四九(二二六) 〇六七六

養運寺

田中光成

〒194-0032

町田市本町田三六五四

平成十九年

赤坂六地藏尊

浄土寺

〒107・0052 東京都港区赤坂四・三・五  
電話〇三(三三八三)三六三〇

明福寺

福井豊信

〒132・0013 江戸川区江戸川三・八・一

愚鈍院 こつぶがや文庫主

中村眞道  
中村瑞貴

〒984・0051 仙台市若林区新寺三・一二・一七  
電話〇二二(二五六)六〇五七

鶏頭山安楽寺

飯田實雄

〒399・4115 駒ヶ根市上穂栄町九・五

宗源寺

齋藤价洲

〒110・0015 台東区東上野五・一・六

勝願寺

〒365・0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一  
電話〇四八(五四二)〇二二七

骨仏の寺

一心寺

〒543・0062 大阪市天王寺区逢阪二・八・六九  
電話〇六(六七七一)〇四四四

白本尊阿弥陀如来

静岡 宝台院

住職 野上智徳

貞松院住職

山田和雄

〒392・0004 諏訪市諏訪二・一六・二二  
電話 〇二六六(五二)一九七〇  
FAX 〇二六六(五二)三四四六

〒112・0002

東京都文京区  
小石川三丁目十四番六号

無量山 傳通院

電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)

定義如来

西方寺

〒989・3213 仙台市青葉区大倉字上下一  
電話〇二二(三九三)二〇一一  
HomePage: <http://www.johgi.or.jp/>  
E-mail: [saihouji@johgi.or.jp](mailto:saihouji@johgi.or.jp)

花巻 廣隆寺

谷地玄雅

九品阿彌陀如来

淨眞寺

〒158・0083 世田谷区奥沢七・四一・三

住職 清水英碩

願行寺住職

佐藤成順

〒140・0004 品川区南品川二・一・一二

梅窓院  
住職

中島真成

東京都港区南青山  
2-26-38

電話 03 (3404) 8447  
ホームページ

<http://www.baisouin.or.jp>

鎌倉大仏殿

高德院

〒248・0016 鎌倉市長谷四・二一・二八  
電話 〇四六七 (二二二) 〇七〇三  
FAX 〇四六七 (二二二) 五〇五一

天光院

真野龍海

<http://www.evam.ne.jp/tenkoin>  
[ryumano@venus.dtl.ne.jp](mailto:ryumano@venus.dtl.ne.jp)

光円寺住職

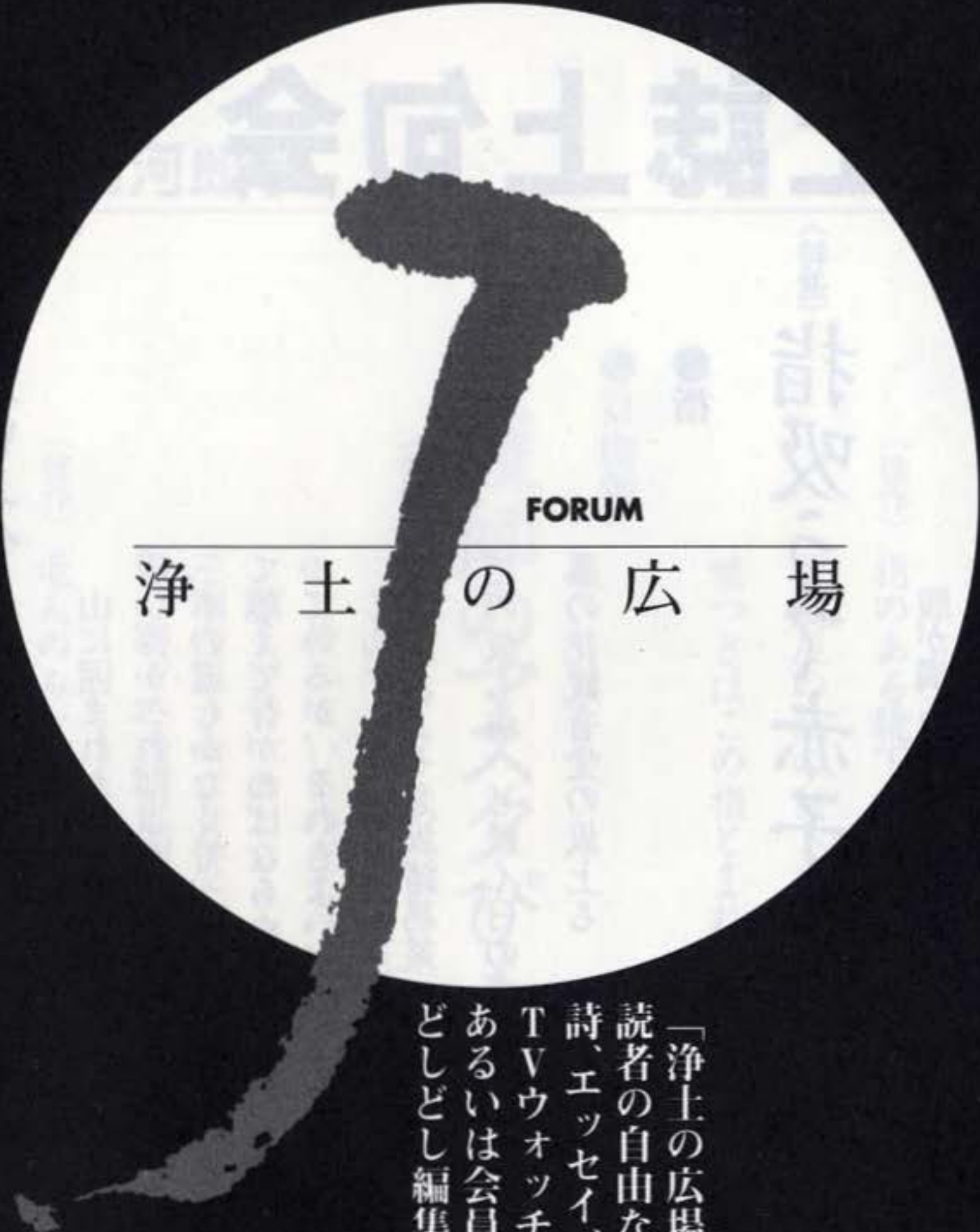
佐藤良純

〒112・0002 文京区小石川四・一二・八

光取寺

大室了皓

〒141・0021 品川区上大崎一・五・一〇  
電話 〇三 (三四四一) 八三八四



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では  
読者の自由な参加をお待ちしています。  
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、  
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。  
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。  
どしどし編集部にお寄せ下さい。

# 浄土誌上句会

●坂

〔特選〕暑い坂越えねばどこにもゆけぬ町

鈴木真理子

山に囲まれた町、山を背負った海の町など  
思い浮かべればよからう。一本道あるいは二、  
三本の道しかなくて、暑い時はどこへも汗し  
て越えて行かねばならぬ。少し荒い表現にな  
っているが、それもよい。

〔佳作〕近路はおよそ急坂諸葛菜

片桐てい女

どの坂も海へと続く日の盛り

内藤 隼人

藤の花観音堂の坂上る

山口 信子

●指

〔特選〕指吸うて赤子の寝入る夏木立

浜口 佳春

腹が満ちていようとなかろうと、指を吸う  
のは赤子の癖である。吸っているうちにいつ  
の間にか眠ってしまう。木陰には涼しい風が

流れているのだろう。出句の中に似たものがあつたが、それもよかった。

〔佳作〕指のある靴下なども遍路の荷

和田 仁

理髪屋の指の白さや芥子の花

浜野 東人

嘘つきはこの指とまれ蚯蚓鳴く

十条 苑を

●自由題

〔特選〕看護師のマスクぴくぴく呼びびに来ぬ

井村 善也

このマスクに季節は感じにくいだが、季語として使っているのだろう。口の動きを「マスクぴくぴく」ととらえたのが面白い。何か急ぐ用だろうか。女性だったら看護婦としたいのだが、この頃は窮屈になった。

〔佳作〕老人のみな凜として祭り足袋

坂下 優子

小でまりや雨の降る日は塀に触れ

小林 恵美

軍艦を見に行く白キシャツを着て

増田 信子



# 風橋自由題

兼題  
(季語ではありません)

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇〇七年七月二十日  
発表・『浄土』二〇〇七年十一月号  
選者・増田河郎子(『南風』主宰)  
応募方法  
●いずれの題とも数の制限はありません。  
●特選各1名・佳作各3名  
葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。  
宛先  
〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内  
月刊『浄土』誌上句会係

坂

坂道を登れば地藏春の貌  
夕焼や異国情緒の急の坂  
秋晴や一葉しのぶ神楽坂  
御通路の鈴流れゆく峠坂  
轉りの転がりくるや弥陀の坂  
老僧の後押し来し坂道よ  
坂の上おもわぬ老舗のよもぎ餅  
山裾の集落の坂幟立つ

工藤 浄真  
中島富士子  
金谷 友江  
河合富美枝  
佐藤 雅子  
飯島 英徳  
石原 新  
井村 善也

指

鈴指先で伸ばすシートや風薫る  
夏野にて指輪無くしたこと内緒  
知恵の輪の解けぬ夕べや夏の指

河合富美枝  
鳥羽 梓  
増田 信子

自由題

みな蜥蜴消えた所を指させり  
塩壺に指をつつ込み盛夏なり  
六月の眼鏡に残る指紋かな  
はつなつの指輪の痕が残る指  
逢瀬の日指折り数え更衣

青山 亜子  
中嶋いづる  
長谷川 裕  
鈴木真理子  
坂下 優子

特急の窓一つずつ初夏の海  
うららかに鴟集合海光る  
向き替えて最後の早苗植え納む  
梅雨兆す手をつき量る骨密度  
梵鐘の一打に揺るる藤の波  
黙々と喪服が歩む薄暑かな  
より多く紫陽花ありし女坂  
水底に自転車見え桜桃忌  
白シャツの襟に鎖骨の始まれり  
六月の少し手強いジャムの蓋  
息詰まるほどあざさゝのあを甘し  
初恋の裏にはりつく蝸牛  
西日射す畳にひとつジャムの瓶  
紫陽花の菓子が出来て来て法事かな  
縁側に並ぶ梅干し夕暮れる

洪口 佳春  
工藤 浄真  
一丁田美恵  
片桐てい女  
河合富美枝  
和田 仁  
国山 掉  
長谷川 裕  
青山 亜子  
井口 吾郎  
十条 苑を  
洪野 振子  
鳥羽 梓  
井口 栞  
村松 芳郎

# さっちゃんね

42

かい

かまち♡おしろ



## 編集後記

埋もれし地蔵の頬に苔光る

岱潤

の一節に、「強気を助け、弱きを憎む」という歌詞があったが、今やギャグの世界ではなくなってしまったかのようだ。

弱者が弱者を虐める構造が、格差社会の拡大に伴って顕著になっている。更に結婚にまつわる部落差別が最近とみに増えていると聴く。首相は一体この国をどのようにしたいと思っているのだろうか。

この「モンスター」は、たちの悪いことに学校のイジメといっしょで、受けている側が、立場が変わるとその人がモンスターに変身してしまうことがあるという。これが弱者同士のイジメの典型だ。

仏教者とはいかなる時も弱者の側にたつことを使命としている。「モンスター」にならないようくれぐれも注意したい。(長)

何年か前一世を風靡したギャグソング

### 雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)  
 巖谷勝正(目黒・祐天寺)  
 大江田博導(仙台・西方寺)  
 北山大超(焼津・光心寺)  
 加藤亮哉(五反田・専修寺)  
 熊谷靖彦(佐賀・本應寺)  
 条原恒久(川越・蓮馨寺)  
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)  
 佐藤成順(品川・願行寺)  
 佐藤良純(小石川・光圓寺)  
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)  
 須藤隆仙(函館・称名寺)  
 高口恭行(大阪・一心寺)  
 田中光成(町田・養運寺)  
 中島真成(青山・梅窓院)  
 中村康雅(清水・実相寺)  
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)  
 野上智徳(静岡・宝台院)  
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)  
 堀田卓爾(静岡・華陽院)  
 本多義敬(両国・回向院)  
 真野龍海(芝・天光院)  
 肱博之(網代・教安寺)  
 水科善隆(長野・寛慶寺)  
 宮林昭彦(大本山・光明寺)  
 宮林雄彦(横浜・大光院)  
 山田和雄(諏訪・貞松院)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

編集チーフ  
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十三巻七・八月号 頒価六百円  
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十九年 六月二十日

発行 平成十九年 七月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

※シネマ随想はお休みさせていただきます。

連載

教えと法話

# 眼目開想

げんもくかいそう

眼目開きて想う

観無量寿経

亜細亜大学講師  
東京高輪・光福寺住職

生野善應

## 心の眼を開いて 思想する。

プライス・コレクションの若冲じやくちゆうを觀ました。伊

藤若冲（一七一六〜一八〇〇）は京都の御問屋の主でありながら、ほとんど独学で画法を学び、独自の画風を大成した人。

題材には好んで雄鶏を扱い、自宅に数十羽の鶏を飼って、写生に打ち込んだそうです。皇居三の丸尚蔵館の群鶏図は大作で、さまざまな仕草の雄鶏と精緻に描かれた羽の複雑な色使いに魅了され

ます。

プライス・コレクションにも同様な画風の雄鶏図もありますが、およそ一筆書きに描いた雄鶏に惹かれました。嘴と脚は直線、胴体は卵型の球形です。そこに群鶏図のデッサンを感じました。若冲は、雄鶏の本質を直線と卵型で把握していたのでしょう。

# 法然上人鑽仰会の

# 本

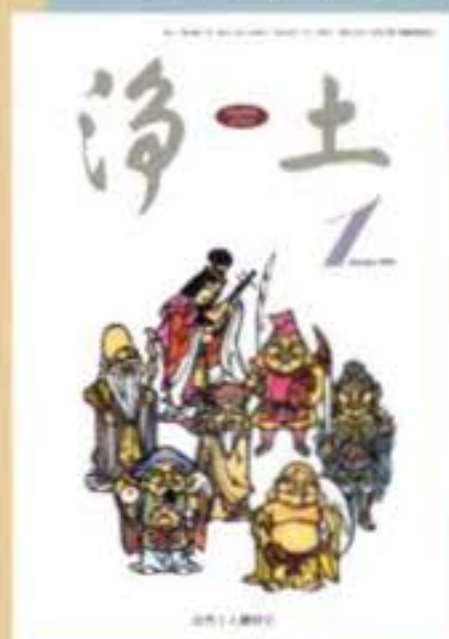


『念佛讀本』完全復刻版  
1,600円



『差出人は法然さん』  
600円

月刊『浄土』  
バックナンバー



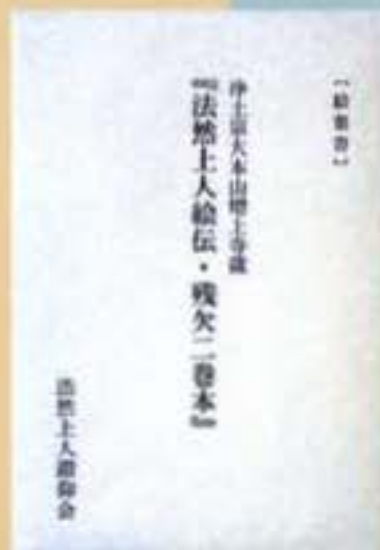
※額装寸法47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)  
『選擇集絵解き物語』含む  
20,000円 (別途梱抱料300円)



『法然上人絵伝絵葉書』  
(8枚セット)800円



委託販売

増補版『浄土への道  
法然上人法語抄』  
1,000円



『ブッダ  
知れば知るほど』  
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵  
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、  
当会へお申し込みください。なお、月  
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ  
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036